



2022（令和4）年 6月 発行
 （編集）愛光本部企画室
 （TEL）043-484-6391
 （メール）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

2022年のゴールデンウィークは3年ぶりに新型コロナウイルスの緊急事態宣言が発令されない連休となり、各地の人出が前年を大幅に上回りました。旅行や外出以外でも、コロナ対策を十分に行い、いろいろと工夫をして過ごされた方も多かったことと思います。

新年度がスタートして、1か月。法人の各事業所でも、コロナ対策に十分に注意して、様々な取り組みを行いました。

□事業経過など（2022.5.1～）

月/日(曜)	記 事
5/1(日)	元日本代表監督イビチャ・オシム氏、死去
5/2(月)	業務執行理事会
5/6(金)	地域食堂委員会
5/9(月)	職員健康診断
5/10(火)	業務執行会議/職員健康診断/防火防災委員会/感染対策・衛生委員会
5/11(水)	人材育成プロジェクト/地域食堂ともいきプロジェクト
5/12(木)	メンター制度委員会/広報委員会/管理者評価面接
5/13(金)	職員健康診断
5/14(土)	道志村山中で見つかった人の肩甲骨が千葉県成田市の小学1年女児とDNA型が一致
5/15(日)	沖縄日本本土への復帰50年
5/16(月)	管理者評価面接
5/17(火)	佐倉圏域実績会議
5/18(水)	地域食堂ともいきお弁当配布/栄養改善委員会
5/19(木)	採用後1年面接/リスクマネジメント委員会
5/20(金)	採用後1年面接/障害者支援事業部実績会議/ボランティア委員会
5/24.26.31	監事監査
5/28(土)	実践発表会
5/31(火)	コンプライアンス委員会

■おもな出来事

□職員実践発表会

28日、昨年度2月に開催延期されていた第10回職員実践発表会がZoomで開催され、3題の発表が行われた。

ルミエールの発表は、18歳で入所した利用者の4年間の成長を振り返っての発表、リホープは本人の意志決定を尊重し『おたがいに楽しみながら』支援を行ってきた高齢支援プロジェクトの、取組みについて、めいわは、昨年7月に法人内の入所施設で初めての新型コロナウイルス罹患が発生した際に、試行錯誤しながらの感染症対応が求められた22日間についての発表であった。

発表時間については、今回は15分程度とし、発表者も伝えたい内容を少しゆとりをもって発表できたと思われる。法人として初の試みであったが、大きなトラブルもなく無事に終了し、各事業所の実践やその想いを共有することができた。

今年度も、2月に、第11回職員実践発表会が開催できるよう計画していきたい。

■月報から

□楽しいゴールデンウイークイベント

4/29から5/5までのゴールデンウイークの期間は、めいわ内でイベントを企画して過ごした。29日（金）は、カラオケとよさこいレッスン。1日（日）は、身体を動かすための卓球とフライングディスク、缶倒しなどのスポーツ。3日（火）は女性の昼食会を、4日（水）は、男性の昼食会を行なった。昼食会のメニューは、愛光の災害用のコンロカートを使って、焼きそばを作った。女性は焼きそばの他に、果物を追加したが、男性は焼きそば（目玉焼きのせ）と水餃子だった。食事の後に出了たポップコーン（塩とキャラメル味）は、予定になかったサプライズメニューだったが、皆さんに大好評だった。

5日は、日中に風呂を開放して、好きな時間にお風呂に入るように企画をした。

（めいわ課長 李 連淑）

□とつぜん音楽会

22日、今年度1回目の「とつぜん音楽会」が開催された。今回は「新しい職員に自分のことを知ってもらおう、新しい職員について知ろう」をテーマに利用者だけでなく、4月から新たにルミエールの一員となった2名の職員にもアンケートをとり音楽を流した。今回、コロナウイルス対策のため大事をとって各ホームに分かれて放送で音楽を流したが、どのホームの利用者も思い思いに楽器を鳴らしたり職員と一緒に歌ったり踊ったりととても楽しまれている様子であった。これまでのリクエスト企画とは異なり職員のリクエストソングを流すという新たな試みも好評で利用者職員一体となって楽しめる会となった。

（ルミエール課長 原 宏之）

□新型コロナウイルス

21日 職員から新型コロナウイルス陽性になったとの連絡があった。前年度は職員、利用者ともに陽性者を出すことなく乗り切り、世間でも少し落ち着いてきたかと思っていた矢先だった。職員、利用者に抗原検査を行った結果、幸いにも全員陰性。健康観察をしながら、施設内で自粛期間を過ごすこととなった。1階と2階の行き来をなくし、日中活動は中止、予定されていた自治会の集まりや行事も中止とした。入浴は密にならないように同室者2名での入浴とし、時間をずらしながらゆっくり実施した。よもぎの園やはちす苑のデイサービスに行っていた利用者も通所が出来なくなり、リホープの中で過ごすことに。いつもと違う生活を余儀なくされ、ストレスも溜まってしまったが、少人数で音楽を聴いたり、ゲームをしたり、職員と一緒に窓ふきをしてもらったりしながら少しでも気がまぎれるように対応した。点字が得意な利用者が、普段は会話する機会がない盲ろうの利用者と指点字で話をする様子も見られた。

(リホープ課長 稲垣 直子)

□初めての給料！

4月から働き始めた利用者にも初給料（工賃）が支給された。学生から社会人になった方、生活介護から就労Bに移行した方にとっては初めてのイベントだ。工賃支給日当日には皆にアナウンスできなかったが、31日に開催した食事会の時に所長から皆に向かって報告があった。当事者たちは少し照れていたが、周りの仲間からは「おめでとう」と労いの言葉が聞かれ盛り上がった。

(佐倉市よもぎの園 近藤 真一)

□富里市農政課 A1ポスター

富里市の農政課より印刷の依頼の連絡をいただいた。以前、同市の企画課が発注したA1サイズのポスター印刷について知り、見積りを依頼したいということであった。

富里市に限ったことではないが、考えてみれば官公庁や関連施設にはA1サイズのポスターが多く掲示されている。

これまで主に受注してきたチラシや薄手の冊子などは各課自前の印刷機でもやろうと思えば作成可能だ。しかしA1サイズとなるとそうはいかない。少部数であろうと急ぎであろうと外注せざるを得ない。今後、行政関係への大判サイズのポスター印刷はPRしていく価値がある商品なのではないかと思えた。今後の印刷営業活動の一戦略として活かしたい。

(ワークショップかぶらぎ 宮部 和樹)

□さっそく健康診断

先月の月報に「健康面での課題」を記載したが、入居者の見えなかった健康面について昨年度より支援している。ジョーの家は看護師が不在である。ジョーの家は、世話人・支援員が限られた関わりの中で入居者の健康状態を確認する能力を求められる現場である。昨年、入居者4名の内、3名は生活習慣の見直しが必要とあり、現在、医療と連携している。今年は、昨年対象としていなかった1名を検診につないだ。以前から、健康診断を受けているのか不明であり、脚の浮腫み、水虫の悪化等があり、いとうクリニックの協力を得て、採血等の健康確認を行うことになった。今までは、ジョーの家で何気なく生活をしていたが、長くジョーの家で生活をしてもらうためにも、日々の生活プラス健康面もしっかりと確認していかないといけないと再度感じたケースである。

(ジョーの家 高橋 健)

□合理的配慮

根郷通所センターへ通う利用者のうち、視覚障害の方が13名いる。

朝、登所すると玄関入り口に設置されている傘立てに白杖を入れることから始まる。しかし、そう簡単には入れられない。朝から白杖相手に苦戦する。もちろん視覚障害が故に空間認知ができないからだ。そこで職員が本人の手を持って「ここだからね」と一緒に白杖を傘立てに入れる。送迎に来たご家族も本人に対し「はい、この辺ね!」と言葉を掛けながら傘立ての高さを伝える。

白杖と格闘した後は、自分のロッカーのカギをキーボックスから取り、更衣室へと向かう。着替えを終えるとロッカーのカギを戻し、流しで手洗いうがいをし、自分の席へ行く。この一連の流れで、限られた職員数で13人の利用者全員を手引きできる訳ではない。そのため、これまでの経験からある程度の空間認知がある利用者は、手探りで歩いている。この光景は、根郷通所センターが平成9年に開所して以来25年間、日々繰り返されてきたのだろう。

そこで、最近、駅の券売機やコンビニのレジ前、銀行や郵便局に設置してある杖掛けを通所玄関前にも設置した。利用者本人が自分で直接白杖を掛けられ、時短にもなる。そして、通所の屋内にも点字ブロックを設置すれば利用者が手探りで歩くこともなくなる。また、根郷通所から木工所へ移動する区間も点字ブロックを設置し、自分で仕事へ行くことができるように整備した。利用者、ご家族からは喜びの声を頂いた。

(めいわ通所部主任 高梨 和憲)

□視覚障害者への支援

ある利用者Aさんが白内障の手術を受けることとなった。既に片眼は殆ど見えておらず、見えている方の眼を維持するため手術となった。担当相談支援事業所の相談員から手術後しばらくは、両眼が見えない状態になるため、グループホームでの支援が大丈夫か否かを問われた。勿論答えは決まっている。愛光としての支援の見せ所である。

手術は無事に終わり、支援を手厚くするまでもなく、職員のノウハウで困難なく支援に当たられた。

(山王の家管理者 高梨 和憲)

□デイサービスで 26年ぶりの再会

K様とO様(96歳)、同級生で幼馴染の親友です。70歳の時に参加された同窓会を最後に、連絡をとっていませんでした。当日、K様はO様のために花を摘んでもってきました。「お互いに元気で、生きてることが分かって、本当にうれしい」と涙をポロポロ、心温まる出来事でした。

(はちす苑 苑長 麻生 知明)

□世代間交流

コロナ禍前、児童センターが行っていた「スマイルクラブ」とまちづくり協議会の『ゴミゼロ運動』に今年は福祉センターも一緒に活動した。駐車場の側溝の掃除とゲートボール場の草取りをおこなった。

ゲートボールの仲間たちも5名の方が参加してくれ、子どもたちに熊手の持ち方などを教えたりする場面が見られた。暑い一日だったが、ゲートボール場が綺麗になり、「これでゲートボールもやりやすくなるよ」

と声を掛けられ、嬉しそうにしていた。ゲートボールを知らないということだったので、今後、活動を一緒にできるような企画も考えていければと思う。

(南部地域福祉センター 小出 博美)

□七井戸公園に行ってきたよ(幼児親子遠足)

5月20日(金)、幼児親子対象の遠足を行った。遠足が開催できたのは、コロナの流行以降3年ぶりである。

場所は、染井野にある七井戸公園。いつもは児童センターで遊んでいるお友だちと一緒に、屋外でのひよこタイムで楽しんだ。手遊び歌や読み聞かせに加えて、アスレチックにシャボン玉遊び、パラバルーン遊び、フィールドビンゴゲームなど、盛りだくさんの内容に子どもたちもママたちもみんな笑顔いっぱい、存分に楽しんだ。

(南部児童センターインストラクター 猪間 美晴)

□「実践 学童保育所 Q&A 30プラス1」

子どもたちにとって「放課後」ってどんな時間？から始まり、これまで愛光が指定管理を受諾してから対処してきた、学童保育の現場で発生した様々なケースを振り返り、問題にどう向き合い、どのように見るか？どのように解決を図っていくのか？また、当事者の気持ちに、いかに寄り添うか？等、対応の方向性を示した冊子が各職員に届けられた。それまで職員一人ひとりの経験値で対応し、退職等で継続性が途切れてしまうことも多々あった支援。悩みながら、迷いながら進んで来た一つひとつのケースの中からアドバイザーがまとめて下さったものである。我々の仕事は、人が人へ対応する仕事である。時代によって変化していくもので、決してAIでは対応できないという自負がある。冊子の内容が全てではないが、『何かしら立ち戻るものがあれば』と思い、ベテラン非常勤職員の読後感想から、「こういうものが欲しかった」「反省しました」等の声が寄せられた。流されがちな日常に熱くなりすぎた頭をリセットし、基本に立ち戻る！このような取り組みが、現場の思いを育て、支援をまるくしていくと感じた。

(学童保育所主任 齋藤 理江)

□「ロコモって何？」～としとらん塾（介護予防教室）より～

13日（金）、20日（金）の2日間、弥富公民館との共同でとしとらん塾を開催した。弥富地区を中心に募集を行い、計10名の参加があった。内容は「ロコモを防ぎ健康寿命を延ばそう」とし、1日目は自分のロコモ度を測定し自分の体を知ってもらった。ロコモとは、「運動器の障害のために移動機能の低下をきたした状態」のことを言い、要支援・要介護の要因第1位とも言われている。健康寿命を長くし自立した生活を送れるようにするには、定期的に運動器のメンテナンスを行いながら、継続して使い続けられるようにしていく必要がある。20cmの台から立ち上がれるか、2ステップの歩幅はどのくらいか実際動いてもらい、体組成計を使用し筋肉量の測定を行い、とても盛り上がった。2日目は1日目の結果を踏まえた講義と効果的な介護予防体操を行った。自分の体がどういう状態にあるのか知った上で体操を行うと、より効果が感じられたのではないかと思う。今回のような測定会を地域で開催し介護予防の意識を高めていきたい。

（総合相談センター所長 森 由美子）

■職員状況（5/31現在）

	人数	前月比
正職員	177	-1
サポート職員	38	2
非常勤職員	157	
計	372	1